

『南山神学』43号(2020年3月) pp. 1-34.

「知恵文学」の概念に関する近年の議論

—主要な論点と箴言研究に対する意義—

加藤 久美子

近年、3人の聖書学者、マーク・スニード、スチュワート・ウィークス、ウィル・カインズによって旧約学における「知恵文学」の概念の問題点を指摘する論考が相次いで公表された¹。これに応答する研究者が現れ、議論は活気を帯びている²。この概念は以前から議論的となっており、その定義について多くの論争がなされてきた。今回の議論には、すでになされたものの反復というべき部分があるが、それだけではなく、いくつかの注目に値する新しい点が見られる。その1つは、聖書学の伝統的な形式批判の諸前提に代わって、新しい文学ジャンル理論が導入されている点であり、もう1つは、「知恵文学」の定義だけではなく、このカテゴリー自体の有用性の疑問視、さらにラディカルに、このカテゴリーの終焉の告知までなされている点である。

スニード、ウィークス、カインズの主張には共通点と相違点があり、彼らに対する反応の一部では問題が十分に理解されていないように見える。本稿は、この3人の主張を取り上げ、問題提起の文脈を概括し、それぞれの主な論点を明らかにして、箴言研究に対するそれらの意義について考察するものである。

1. 文学ジャンル理論

今回の議論のきっかけの1つとなった論文の中で、スニードは、文芸学の新

¹ Sneed 2011; Sneed 2015a; Sneed 2015b; Weeks 2010; Weeks 2015; Weeks 2016; Kynes 2019.

² Sneed 2015c 参照。

しいジャンル理論を用いて、「知恵伝統」に関する従来の学説を批判しており³、スニードの問題提起に応じた研究者の多くもそうした理論を参照している。これは、近年の死海文書研究における新しいジャンル理論の導入⁴と並行しており、その背景には、聖書学における形式批判（form criticism）とジャンル研究の刷新の必要性の認識の高まりがある。

文学ジャンルに関する諸見解の中で、今回の議論を理解するために重要だとと思われる点を3つ挙げておきたい⁵。第1は、文学ジャンルは、「分類ボックス」すなわち分類学的な排他的カテゴリーではなく、曖昧さを許容する柔軟なものだという見方である。この見方は、現実のテキストに対して分類学的なジャンル概念が機能しないことから生じた（Zahn 2012, 276）。しかし聖書学では依然として古いジャンル概念が優勢である。

聖書学において支配的なジャンルのモデルは、長い間ずっと分類学的だった。文学ジャンルは、テキストが共有する必須の諸特徴のリストに基づいてテキストを分類するために用いられている。形式批判は、個々の文学ジャンルを特有の歴史的な生の座（Sitz im Leben）と結びつけることを重視することを通して、聖書学におけるジャンルへのアプローチの「硬直性」を強化してきた。（Kynes 2019, 108）

一方、文学ジャンルは曖昧さを許容する柔軟なものという見方によれば、テキストは同時に複数のジャンルに参加でき（Zahn 2012, 277）、また、ジャンルに参加するテキストの間には参加の度合いの違いがあり得る（Newsom 2007, 24; Fox 2015, 78）。さらに、ジャンル自体は互いに結合することも、変化することもある（Kynes 2019, 108）。

「知恵文学」研究では上位のジャンルと下位のジャンルを区別し、ジャンルの

³ Sneed 2011, 54–57.

⁴ Newsom 2007; Newsom 2010; Wright 2010; Zahn 2012.

⁵ Newsom 2007, 19–21 ; Zahn 2012, 276–281; Fox 2015, 77–78; Kynes 2019 参照。

階層的な秩序を示すことがみられるが⁶、この手法もまた分類学的であり、上位と下位の区別は現実のテキストに即さない恣意的なものにならざるを得ない。スニードは「知恵文学」は比較的抽象度の高いカテゴリーであるから、ジャンルではなく「文学のモード」と呼ぶべきだと言うが⁸、モードという上位レベルの設定もまた分類学的であり、必要ない。

ジャンルに関して指摘しておきたい第2の点は、文学ジャンルとは、読者によって「諸々のテキストの間に知覚された何らかの有意義な類似性のゆえに集められたテキストのグループ」(Kynes 2019, 13)であるという定義である。この定義は、文学ジャンルの諸特徴とは、テキストの中ではなく、諸々のテキストの間に存在するものであり、作者の創造行為ではなく、読者の比較行為の中に存在する (Kynes 2019, 115) ことを明確にしている⁹。

モーリー・ザーンは、死海文書のジャンルを論じる中で、「ジャンルとは、作者と読者の両方が識別するであろうところの、ある状況において要求される反応のパターン」であるという修辞学のジャンル理論を紹介している (Zahn 2012, 279)。このような、ジャンルを作者と読者の間の取り決めとして捉える修辞学的な見方は、ジャンルの機能の一つの側面を正しく捉えている。しかしこの機能を論じる時も、作者はジャンルを意図的に利用する、つまり他のテキストの読者として知ったジャンルの中に作品を置くことはできるが、読者なしに新しいジャンルを創出することはできないこと、あるジャンルの中で書くという作者の意図は、テキストがあるジャンルに含まれることに必要な判断基準にはな

⁶ ローランド E. マーフィーは「知恵文学」を上位のカテゴリーとし、様々なより小さい「知恵ジャンル」もしくは「知恵形式」とそれを区別する。Murphy 1981, 3-6. またコリンズは「知恵」をマクロジャンルと呼ぶことを提案している。Collins 1997b, 266.

⁷ Kynes 2019, 14.

⁸ Sneed 2011, 57.

⁹ この点に関連して、カインズは、スニードによるジャンルの説明を訂正している。スニードは、「ジャンルはテキスト自体の中に存在するのではなく、作者と読者の頭の中だけに存在する」(Sneed 2015a, 39)と言う。これに対して、カインズは、「私は『ジャンルはテキスト自体の中に存在しない』という点ではスニードに同意するが、それらは『作者と読者の頭の中だけにある』という彼の結論とは意見を異にする。そうではなく、ジャンルは読者たちと諸々のテキストの間に出現するのである」(Kynes 2019, 115)と言う。

り得ないこと¹⁰を認識する必要がある。

第3の点は、古代の作品の研究における、テキストの著述及び編集の同時代の読者が認知していたジャンルと現代の研究者が発見的手法として定めるジャンルの区別の必要性である。前者は、資料を用いて研究者によって歴史的に復元される。一方後者は、文学や思想の歴史的研究にも役立ち得るが、歴史的に復元されたジャンルではない。マイケル V. フォックスは後者を「発見的ジャンル」と呼び、それは文学及び観念体系の比較のために有用である限りにおいて有効であるとし、「知恵文学」はこれに該当すると言う (Fox 2015, 75, 82)。文学ジャンルとしての「知恵文学」に関する議論では、この2つが区別されていないことがしばしばみられるが、意味ある議論のために両者を区別しなければならない。

2. 旧約学における「知恵文学」の概念

スニード、ウィークス、カインズが問題にしていることを明らかにするために、主に2000年以降に出版された事典や入門書を参照し、現在旧約学で普及している「知恵文学」の概念を確認しておきたい¹¹。

2. 1. 旧約の「知恵文学」というカテゴリー

旧約学では、「知恵文学」(wisdom literature) は旧約の文書 (books) のカテゴリーを指す用語として用いられる。この意味での「旧約の知恵文学」は「旧約の知恵」と略されることがある¹²。普通、ヘブライ語聖書では、箴言、ヨブ記、コヘレトの言葉の3つの書、また第二正典／外典を含む場合には、これらにシ

¹⁰ Kynes 2019, 116 参照。

¹¹ 以下の論述は筆者によるが、問題の分節化についてはカインズに負うところが大きい。Kynes 2019, 12-18, 25-59。

¹² カインズの2019年の研究書では、この意味の「知恵」が"Wisdom"と大文字書きされている。Kynes 2019, 12。なお旧約正典の四区分構造の第三区分(ヨブ、詩、箴、コヘ、雅、知、シラ)が「知恵」と呼ばれることがあるが(例えば、Zenger 2012, 32)、これは、別のカテゴリーとして区別する必要がある。

ラ書と知恵の書を加えた5つの書がこのカテゴリーに分類される¹³。

旧約の「知恵文学」の序論は、このカテゴリーの定義の困難から始めることがしきたりのようになっている¹⁴。「知恵文学」に分類される文書の形式と内容が多様で、それらだけに共有される特徴の定義が難しいからである。「知恵文学」の「際立った特徴」として、「典型的にイスラエルのまたユダヤ的と普通見なされるものの欠如」、すなわち「族長たちへの約束、出エジプトとモーセ、契約とシナイ、ダビデへの約束（サム下7）などへの言及がない」（Murphy 2002, 1）ことが指摘されるが¹⁵、これも「知恵文学」カテゴリー特有ではなく、他のテキスト、例えば、詩編の個人の嘆きや感謝の詩などにも見られる。このように、このカテゴリー特有のものの定義が困難な中で、知恵文学研究者たちはしばしば、唯一の確かな事実として、上記の5つの文書が「知恵文学」の中核をなすという研究者の合意を挙げ、それをこのカテゴリーの妥当性の保証であるかのように扱う¹⁶。

2. 2. 文学ジャンルとしての「知恵文学」

「知恵文学」は、文学ジャンルでもあると理解されている。カインズは、「知恵文学」は旧約の文書のカテゴリーであり、また文学ジャンルでもあるが、「カテゴリー」と「文学ジャンル」という用語を交換可能なものとして使用するのには避けた方がよいと言う（Kynes 2019, 13）。なぜなら、カテゴリーとして文学ジャンルについて語る時、ジャンルとは、相互に重なり合わない排他的なカテゴリーであり、1つのテキストはただ1つの種、1つのジャンルにしか属さないとする分類学的な見方に陥りやすいからである。

文学ジャンルとしての「知恵文学」は、形式的類似性を基準として定義され

¹³ これらに加えて、いくつかの詩編（「知恵の詩編」）をこれに入れる研究者が多い。Murphy 2002, 1 参照。

¹⁴ 例えば、Crenshaw 2010, 7. Kynes 2019, 25 参照。

¹⁵ マーフィーも述べているように、これは第二正典のシラ書と知恵の書には該当しない。シラ 44-50 章、知 11-19 章参照。

¹⁶ 例えば、Crenshaw 2010, 10; Collins 2010, 429. Kynes 2019, 25-26, 58 参照。

たジャンルではない¹⁷。なぜなら「知恵文学」に含まれるテキストは形式的には多様だからである¹⁸。このことを理由に、「知恵文学」は文学ジャンルではないとする見方が聖書学には見られるが¹⁹、現代のジャンル理論において形式的類似性は文学ジャンルの要件とされておらず²⁰、形式的類似性はなくても、テキストの間に何らかの有意義な類似性が知覚されるなら、そのテキストのグループに文学ジャンルという用語を使用すること自体に問題はない²¹。

文学ジャンルとしての「知恵文学」の概念は、旧約文書だけではなく、古代エジプト及び西アジアの文書にも適用されている。ジェレミー・コーリーは、シラ書注解の序論で、そのような意味でのこの用語について次のように簡潔に記述している。

知恵文学は、哲学的な諸問題を探求する、もしくはいかに振舞うかに関する助言を提供するテキストを指す用語である。(Corley 2013, 7)

これによれば、「知恵文学」は、主題的に異なる2種類のテキスト、すなわちいかに振舞うかに関する助言を提供するものと哲学的な諸問題を探求するものからなるテキストのグループである。フォックスもまた箴言注解で、聖書だけではなく、近隣文化の文書を含めた「知恵文学」は2種類のテキストを合わせたものであると言う。

¹⁷ マーフィーは「旧約文学の諸形式」叢書 (FOTL) の『知恵文学』の巻で「『知恵文学』は、形式批判の用語ではない」(Murphy 1981, 3)と記している。

¹⁸ 例えば、親から息子への教訓(箴31:1-9)、アフォリズム(箴10:1-22:16)、アルファベット折句の詩(箴31:10-31)、ナラティブと対話(ヨブ記)、自伝的報告と省察(コヘレトの言葉)など。

¹⁹ 例えば、Collins 1997b, 265.

²⁰ ダフによる『現代のジャンル理論』の用語解説では、文学ジャンルとは「構造的、主題的、機能的基準の1つあるいはいくつかによって定義される」(Duff 2000, xiii)とされており、形式すなわちテキストの構造の類似性は基準の1つにすぎない。

²¹ Kynes 2019, 14 参照。

知恵文書 (Wisdom²² books) の 2 つの主要なジャンル、すなわち訓育的な知恵 (didactic Wisdom) と批判的 (もしくは思弁的) な知恵 (critical (or speculative) Wisdom) がある。第 2 の種類は無定形である。これに属する作品は必ずしも懐疑的ではない。それらの共通の特徴は、訓育的な知恵文学に見出される教理と価値を直接的に教え込むよりもむしろ、それらについて省察し論評を加える点にある。(Fox 2000, 17)

このように 2 種類のテキストを合わせて「知恵文学」とみなす理由をコーリーとフォックスは説明していないが²³、この考え方は、旧約の「知恵文学」、特にヘブライ語聖書の 3 つの文書 (箴言, ヨブ, コヘ) がそのような 2 種類のテキストを合わせたものだと考えられていることに由来すると推測される²⁴。

フォックスは上記の記述に続けて「箴言が属する訓育的な知恵はほとんど常に父から息子への言葉として表現されている」(Fox 2000, 18) と言い、個別の

²² フォックスは「文学ジャンルもしくは人格化された知恵夫人を指す時」"Wisdom"と大文字書きする方針を採っている。Fox 2000, 3, note 1.

²³ 2 種類のテキストを合わせた「知恵文学」という概念はクレンショウにもみられる。クレンショウは、「経験的な知恵」と「理論的な知恵」の 2 つを挙げ、前者は「主に、簡潔で実際のな詞 (sayings) と比較的長い教訓の形式をとる」と特徴づけている。Crenshaw 2010, 6. またエジプト学でも「知恵文学」は 2 種類からなると定義されている。Shupak 2015, 266; 小山 2004 参照。ただし Brunner 1952 は「教訓」だけを「知恵文学」としている。一方、楔形文字学では、もっと多くの種類の文書を「知恵文学」とする見方が一般的である。中田 2004 参照。しかしアルスターは「シュメールの知恵」の選集において、この慣例に従うのではなく、「知恵」を実存的態度と定義し、「伝統的もしくは保守的」と「批判的」という「2 つの対照的な実存的態度」がみられるテキストを「知恵」に含めるという方針を示す。Alster 2005, 24–25. Cohen 2013, 14–15 も参照。

²⁴ 箴言は「訓育的な知恵」、ヨブ記とコヘレトの言葉は「批判的な知恵」という分類が普通であるように思われるが、フォックスは箴言だけではなく、コヘレトも「訓育的な知恵」に分類されるべきだという独自の見解を示している (Fox 2000, 17)。なお、ヨラム・コヘンは、古バビロニア期の収集書板 (Sammeltafeln) 及び 1 つのカタログに、「肯定的知恵」と「否定的知恵」という 2 種類の「知恵」の作品が含まれていることを指摘し、ここにはこれらを合わせて 1 つのジャンルと捉える考えが表されているとしている。Cohen 2013, 14–15, 60–61. しかし書板には賛歌や祈りなど他のジャンルの作品が含まれており、またカタログには未知の作品が含まれている。この資料の解釈についてはさらに検討が必要である。Kynes 2019, 16 参照。

作品の概観の部分では「訓育的な知恵」の作品だけを取り上げている (Fox 2000, 19-23)。フォックスにおける「訓育的な知恵」は、他の研究者によって「教訓」(instruction)とも呼ばれており、古代の読者に知られていたジャンルとして想定できるものである。ここで、「訓育的な知恵」(すなわち「教訓」と「知恵文学」の区別に注意する必要がある²⁵。ウィークスが有用性を疑問視し (Weeks 2016a), カインズが終焉を告げている (Kynes 2019, 9-10) のは、前者ではなく、後者である。

楔形文字学では『ギルガメシュ叙事詩』を「知恵文学」と捉える見方がある²⁶。それでは「知恵文学」の範囲が広がりすぎるように見えるかもしれない。しかしコーリーのように「知恵文学」の1つのタイプとして「哲学的な諸問題を探求するテキスト」があると定義する場合、『ギルガメシュ叙事詩』に哲学的あるいは実存的省察があるなら、これを「知恵文学」に含めることは定義に反しない。

ところで、「知恵文学」は名称から見れば、「知恵の概念に強い関心を持つ」という特徴によって定義されたジャンルであってもおかしくない。実際、旧約の「知恵文学」カテゴリーの文書(箴言, ヨブ, コヘ, シラ, 知)では知恵や知識を意味する語(ヘブライ語ではホクマー, ダアトなど)がきわめて頻繁に用いられており、また、これらの文書には知恵の概念そのものへの関心が認められる²⁷。しかし、「知恵文学」がそのように定義されていないことは、20世紀前半に始まった近隣文化の文書へのその適用の方法に示されている。というのも、

²⁵ この観点で、フォックスがこの「訓育的な知恵」の作品の概観の表題に「訓育的な」を省き「箴言以前の知恵」としているのは誤解を招く。2015年の論文では、フォックスはより明瞭に両者を区別している。

²⁶ George 2003, 4, 33; 渡辺 2010. 渡辺和子は、標準版の『ギルガメシュ叙事詩』について、「何かを伝えようとしながらも、なおそれが容易に読み取られないような書き方や構造を持つ文書」(渡辺 2010, 67)という意味での「奥義書」であり(渡辺 2010, 94), また同時に、重要なことについて沈黙を守り、「『知恵ある者は聞いて(読んで)悟れ』という隠されたメッセージ」である余白を残すという意味で、「知恵文学の一種といえる」としている。渡辺 2010, 94.

²⁷ Weeks 2010, 1.

「知恵文学」に含められた近隣文化の作品では、聖書の「知恵文学」に見られるような知恵の概念そのものへの関心はみられないからである²⁸。

「知恵」あるいは「知恵文学」の概念は、20世紀後半から、第二神殿時代ユダヤ教の聖書外文書²⁹、中でも特に死海文書にも用いられている³⁰。死海文書研究では、後述するクレンショウの知恵文学入門が、この概念の定義に関する議論の出発点としてしばしば参照されている³¹。

以上のように、文学ジャンルとしての「知恵文学」は、旧約文書の「知恵文学」カテゴリーに基づいて構築され、関連分野の類似作品にも適用されるようになった概念だということができる。

2. 3. 運動、伝統、世界観としての「知恵」

「知恵」という用語は、以上のように旧約文書のカテゴリー及び文学ジャンルについて用いられるが、さらに、運動や伝統、世界観についても用いられる。クリスティン・ロイ・ヨーダーによれば、聖書学の用語としての「知恵」は以下の3つを指す。

- a. 知者たち及び教育的諸目的に結びついていた古代世界における 1 つの運動。
- b. 特定の世界観もしくは神学的視点 (a particular worldview or theological perspective)。
- c. ある特定の聖書の文書、すなわち箴言、ヨブ記、コヘレトの言葉及び第

²⁸ 近隣文化の「知恵文学」と旧約のそれとのこの違いは、早くから指摘されている。Brunner 1952, 90, note 1; Lambert 1960, 1.

²⁹ Collins 1997a. さらに、フォックスは箴言注解の序論で「知恵文学に付属する後代の作品」として、第二神殿時代だけではなく、中世のユダヤ教文書も挙げている。Fox 2000, 24–27.

³⁰ Harrington 1996; Collins 1997b; Collins 2010; Goff 2009; Goff 2010; 勝村 2019.

³¹ Collins 1997b, 266–267; Goff 2010, 318–319.

二正典の書であるシラ書と知恵の書。³²

ここで、旧約文書のカテゴリーとしての「知恵」は、「運動」及び「世界観もしくは神学的視点」と結びつけられている。また、2015年の論集におけるアネッテ・シェレンベルクの論文では、「特有の世界観 (a specific worldview) によって他と区別され、知恵文書を作り出した知者たちという特有の集団 (a specific group of sages) によって保持された知恵伝統 (a wisdom tradition) は存在するという伝統的合意は維持されてきた」³³と述べられている。こちらでは「運動」の代わりに「伝統」という用語が使われ、「知恵文書」が「特有の集団の伝統」及び「特有の世界観」と結びつけられている。

「知恵」の運動、伝統、世界観に関する学説は、理論的には、旧約の「知恵文学」に共有される特有の世界観が発見され、それを根拠に運動もしくは伝統の存在が推論されるという順序で立てられているはずである。しかし実際には、現在普及する「知恵」の世界観、運動、伝統に関する記述は、「知恵文学」以外の聖書の文書や近隣文化の事象から導き出された推論を複雑に組み合わせて作られている（後述参照）。

なお「知恵」はヘブライ語の名詞ホクマーの訳語でもあるため、聖書事典の「知恵」の項目には、上記のような聖書学用語の意味ではなく、ヘブライ語の名詞ホクマー（知恵）と形容詞ハカーム（知恵がある）及び類義語の意味を記述することもできるが、このような事典項目は希である³⁴。また、聖書学用語としての「知恵」は、ヘブライ語聖書におけるホクマーの意味の一部としか関連していないので、両者の区別が必要であるが、区別が不明瞭な記述もみられる³⁵。

³² Yoder 2011. ヨーダーでは運動、文書、世界観の順。本稿の目的に合わせて順序を変更した。

³³ Schellenberg 2015, 115.

³⁴ 勝村 2004 は希な例。

³⁵ 例えば、飯 2002; Hausmann 2009.

2. 4. いわゆる「知恵」の世界観

20世紀前半における近隣文化の「知恵文学」の発見以降次第に発達し、20世紀後半に旧約学で広く普及した「知恵」の世界観に関する見方は、例えば、1962年のハルトムート・ゲーゼの事典項目、1981年から版を重ねて英語圏で強い影響力をもつジェイムズ L. クレンショウの知恵文学入門第3版(2010年)、エーリヒ・ツェンガー(フレーフェル改訂)によるドイツ語の旧約入門第8版(2012年)に見ることができる。これらには支持できない点が含まれているが、議論の背景として、以下に試訳で引用しておきたい。なお傍点による強調は引用者による。

ゲーゼ

知恵 1. 全般的な特徴。知恵とは、通常、ギリシア及びヘレニズム哲学の古代オリエントにおける先駆けであるところの、古代オリエント全般に普及していた精神運動であると解されており、その運動には、それに合致する諸類型の複合体として訓育的な文学、すなわち知恵文学が帰せられている。その運動において重要なのは、自らがそこに置かれているのを人が見出すところの生、人的かつ自然的である世界を、経験的な諸方法で秩序〔単数形〕として理解する人間の努力である。すなわち、生の諸経過を観察することによって知覚される諸特徴を、的確な言葉、理解を助ける喩えのうち捉えることによって、また、対照に満ちた総体に集中して向かうことにおいて。この金言の経験的な統覚は、(より後代の) 哲学的体系的な思考のように現象を帰納的に一つの原理に帰することはしない。その結果、その秩序〔単数形〕は、人間に要求する相手として、また、それが理解しがたいものに留まる場合には、従属を要求する神的なものとして経験される。(Gesé 1962, 1574) []は引用者による補足。以下同様。

クレンショウ

知恵は、現実に対する特定の態度 (a particular attitude toward reality),

すなわち一つの世界観である。その姿勢 (that stance) は、時を超えて生き続け、肥沃な三日月地帯の端から端までゆきわたっている。それは、イスラエルでは、小さな村の生活から始まり、宮廷のグループを経て、書記の環境まで持続している。この現実に対する広く普及した態度は、エジプトにおける古王国の崩壊 (前 2200 年頃) とユーフラテス川の向こうでのシュメール人の消滅 (前 1750 年頃) を越えて生き続けた。方向認識の基準点として、この方法で物を見ることは、人類の出現とともに始まった。この方法は、男女にとって何が善であるかを問い、また、すべての本質的な答えは、現実そのものに関する諸々の徴を内に秘めた経験から学ぶことができる。この世界観は、宇宙という語のもつ最も深く豊かな意味での、宇宙を前提している。一なる神はあらゆる現実の中に真理³⁶を埋め込んだ。人間の務めは、この見識を探し求め、そうすることで宇宙と調和して生きることを学ぶことである。(Crenshaw 2010, 11) ³⁷

ツェンガー (フレーフェルによる改訂)

<知恵>という概念は、古代において、メソポタミアからエジプトまで、またギリシアからローマまで、広く行き渡っていた一つの知的な現象を指しており、それは、実践的な人生知、ないし実践によって獲得され、また実践を目的する日常知と経験知と呼ぶことができるものである。(中略) メソポタミア、エジプト、古代イスラエルの知恵の教えに従うと、すべての個別の規則は包括的な世界秩序すなわち創造秩序の構成要素である。神々は世界をそれに向けて構築し、神々は世界に生命を促進する力を備えた。すべてを包括する生の秩序は、神々の世界さえ包摂し、すみずみまで統轄している。(中略) 神々と世界を統制するこの原秩序をシュメール人はメ、

³⁶ この「真理」は他の多くの箇所では「秩序」と呼ばれている。例えば、「イスラエルの知者たちは、宇宙に隠された根本的な秩序を認めていたようである。(中略) 宇宙を支える普遍的な秩序と調和して行動することによって (後略)」(Crenshaw 2010, 61)。

³⁷ 初版は、Crenshaw 1981, 17-18; 初版の中村訳は、クレンショウ 1987, 22 参照。

エジプト人はマアト、イスラエル人はツェダカーと呼ぶ。知恵的な生活術は、すべてを包括する秩序を、生の遂行において認識し、また「義」を行うことによって強固にすることに存する。(Zenger 2012, 405–407)

傍点部にみられるように、いわゆる「知恵」の世界観に関する記述では、次の2つの要素がしばしば現れる。すなわち経験主義（認識、知識の根拠を経験に求める立場）と1つの世界秩序の観念（人生にみられる現象の諸々の規則性の背後に1つの世界秩序ないし創造秩序があるという考え）である。

2. 5. 「知者たち」の運動もしくは伝統に関する学説

旧約学における「知者たち」及び彼らの運動もしくは伝統に関する学説の概要は次のようなものである。「知恵」とは「古代オリエント全般に普及していた精神運動」であり、「知恵文学」はその所産である³⁸。イスラエルの「知恵文学」は、少なくとも初期のものは、王国の行政官によって、外国の手本に倣って行政官の教育のために作られ、そのために用いられた³⁹。イスラエルにおける「知恵運動」、 「知恵伝統」の担い手は、「知者たち」（ハカミーム）と呼ばれる専門階級である⁴⁰。イスラエルには、「知恵運動」、 「知恵伝統」を育成する「知恵学校、知恵学派」（Weisheitsschule, wisdom school）⁴¹、すなわち「知恵」の教育機関あるいは学派が存在した。「知恵学校、知恵学派」の教師は、「知恵の教師」（Weisheitslehrer）とも呼ばれる⁴²。

この学説は、古代エジプト及びメソポタミアの「知恵文学」とされる作品と書記階級との関係からの類推によって立てられたとみなされることが多いが、実際には、エジプト学及び楔形文字学に見られない、19世紀の旧約学に由来す

³⁸ Gese 1962, 1574. 上掲引用参照。

³⁹ Weeks 2016, 11; Weeks 1994, 2–3.

⁴⁰ Crenshaw 2010, 23–25.

⁴¹ Hermisson 1968, 128–130.

⁴² Hermisson 1968, 123.

る観念である「知恵学校、知恵学派」という観念を含んでいる（後述参照）。

2. 6. 「知恵文学」研究史の従来 of 記述

従来、上述のような「知恵」の運動、伝統、世界観に関する学説は、20世紀における研究の過程で生じたと捉えられており、「知恵文学」研究史の記述は、20世紀初頭から始められることが多かった。その流れはおよそ次のようなものである⁴³。1924年にエジプト学者エアマンらによって古代エジプトの『アメンエムオペの教訓』と箴言22章17節-23章11節との類似性が指摘され、その後さらに多くの近隣文化の類似文書が発見されて、「知恵文学」に注目が集まった。第二次世界大戦の勃発までに、聖書の「知恵」と近隣文化の「知恵」の類似の度合い、「知恵」の諸形式とその社会的環境、「知恵」の思想の構造について多くの研究がなされた（Crenshaw 1976, 1-35）。大戦後に救済史と契約という神学的な主題に焦点がおかれるようになると、これらの主題への関心を示さず、近隣文化との類似性を示す「知恵」は、「非イスラエルの」という刻印をおされて、神学的に周縁に追いやられた（Weeks 2016b, 3; Kynes 2019, 30）。1960年代から再び風向きが変わり、旧約文書の広い範囲に「知恵」の影響を見いだす動きが起こり（Kynes 2019, 31）、これと共にイスラエルにおける「知恵」の世界観や神学の位置づけに対する関心が増した。ゲルハルト・フォン・ラートの最晩年の著作『イスラエルにおける知恵』（1970年）はこの傾向を一層強めた（フォン・ラート 1988）。一方、主要な知恵文学研究者の1人であるクレンショウは、旧約文書における「知恵」の範囲の拡大に反対し（Crenshaw 1976, 9-13）、「知恵」の影響を受けたとされるテキストは十分に「知恵的」ではなく、「知恵」に含めるべきではない、「知恵文学」は伝統的合意によって定められた文書に限定すべきだと主張した（Crenshaw 1976, 5）。20世紀初めから現在まで、旧約の「知恵」に対する神学的評価は否定と肯定の間で揺れ動いている⁴⁴。

⁴³ Kynes 2019, 29-36; Weeks 2016a, 10-11.

⁴⁴ Schwienhorst-Schönberger 2013 参照。

このような 20 世紀初頭に始点を置く研究史に対してカインズは、「知恵文学」概念の起源は 19 世紀中葉にあり、研究史を 19 世紀まで遡る必要があると主張している。

3. スニード、ウィークス、カインズの論点

3. 1. これまでの議論との連続性

スニードとウィークスの論点の 1 つは、2. 4, 2. 5 において示したような「知恵」の世界観と運動に関する学説が聖書テキスト及び聖書外の資料に即していないという批判であるが、これについては、すでに幾人かの研究者によって指摘されており、この点に関する 2 人の主張には、特別な新しさはない。例えば、「知恵」の世界観の特徴とされる「世界秩序の観念」については、これのもとにあるエジプト学者 H. フランクフォート及び旧約学者 H. H. シュミートによる古代エジプトの概念マアトの理解に対して、エジプト学者ヤン・アスマンによる具体的な批判がなされている⁴⁵。また、箴言については、「世界に内在する 1 つの秩序」の観念を作者たちが持っていたというテキスト内の根拠は薄弱であることをレナルト・ボストレムが詳しく論じている⁴⁶。「知恵」の世界観のもう 1 つの特徴とされる経験主義については、フォックスが箴言の作者たちとコヘレトの違いを挙げ、聖書の「知恵文学」全般が経験主義的とはいえないことを指摘している⁴⁷。

国際的な「知恵運動」の説については、ウィークス自身がすでに 1994 年の研究書『イスラエルの初期の知恵』で取り上げ、古代エジプト及びメソポタミアでは、「知恵文学」とされる文書は書記階級によって書かれた多様なジャンルの文書の一部であり、「知恵文学」と結びついた特有の「知恵学校、知恵学派」をそれらの地域において特定することはできないこと、従って、国際的な「知恵

⁴⁵ Assmann 1990, 31–39. また Fox 1995 も参照。

⁴⁶ Boström 1990, 90–140. Weeks 2010, 112–113 参照。

⁴⁷ Fox 2009, 963–967. また Weeks 2010, 114–116 も参照。

運動」があったとは考え難いことを論証している⁴⁸。また同書で、いわゆる「イスラエルの初期の知恵」(箴 10-29 章)の執筆や編集が宮廷で行われたことを示す証拠はないこと⁴⁹、及び「知恵ある者、知者」(ハカーム)が王政期のイスラエルの官吏階級の呼称だったとはいえないことも論じている。

スニードとウィークスの新しい点は、このような批判に加えて、「知恵」特有の世界観を伴う「知恵」運動を前提しない「知恵文学」の読み方を提案する点にある。また、ウィークスとカインズには、スニードには見られない論点がある。それは、旧約の「知恵文学」というカテゴリーの有用性の疑問視である。以下に、重複をできるだけ省き、3人の主な論点を示したい。

3. 2. マーク・スニード

スニードの中心的な主張は、「ヘブライ語の知恵文学〔箴、ヨブ、コヘ〕は、祭司たち及び預言者たちのそれらとは明らかに異なる世界観、伝統、運動を代表しているという見方、及びそれがヤーウエ宗教 (Yahwism) に代わる別の選択肢を提供し、反啓示的だという見方」(Sneed 2011, 53-54)に対する反対である。彼は、その理由の1つとして、文学ジャンルは「型に従った世界」(a conventional world)を創出することはできるが、作者の世界観のような多くの

⁴⁸ Weeks 1994, 7-8. また Fox 1996b, 228-230; Weeks 2010, 127-134; Kynes 15-18 も参照。ウィークスの研究書は「イスラエルの初期の知恵」に関する諸学説の再検討を目的としている。書名が誤解を招くが、著者はいわゆる「初期の知恵」は必ずしも初期とはいえないという立場を採っている (Weeks 1994, 5)。この書についてフォックスは「彼が挑戦している見解は、ほとんどが 1950 年代、60 年代の産物で、いまや古くさいものであり、決して確立してもいないし、普遍的に受け入れられてもいない。大部分はすでに効果的に批判されている。しかしながら、これらの理論はある種の評判を持っており、それは、ウィークスが提示したような分別ある思慮深い評価に正当性を与える」(Fox 1996a, 138)と評している。しかしその後 20 年を経てなお国際的「知恵運動」の説が一定の影響を持っているため、2015 年の論集でフォックス自身が「知恵学校は存在しなかった」、「知恵の作者たちは他から区別される党派ではなかった」という 2 つの命題の論証に紙幅を割いている。Fox 2015, 69-74. Shupak 2015, 280 も参照。

⁴⁹ Weeks 1994, 41-56, 74-91。

情報を伝えることはできない、というジャンルの基本的性質を挙げる⁵⁰。簡単に言えば、「知恵文学」の文書に救済史や契約という主題が現れないからといって、作者がそれらを中心に置く神学に反対する特有の世界観をもっていたと結論することはできないということである。

これに加えて、スニードは、「知恵文学」の作者は、「学者、教師として役割を果たした上級の書記たち」(Sneed 2011, 62) すなわち「書記学者たち、文献に通じた知者たち」(scribal scholars or literary sages) (Sneed 2011, 71) であり、これらの書記たちが聖書の他のタイプの文学についても「作成もしくは保存、あるいはその両方」(the composition and/or preservation) に責を負ったという見解を提示する (Sneed 2011, 54, 62-63, 71 も参照)。この点についてさらに、2015年の『知者たちの社会的世界—イスラエル及びユダヤの知恵文学入門』では、デイヴィッド・カーらによるヘブライ語聖書の形成を古代イスラエルの書記の教育過程と結びつける説を参照し、「知恵文学」とその他のジャンルが学ばれた書記の教育過程を論じている (Sneed 2015b, 147-182)。そこで彼は、王政期にも捕囚後にも比較的短く容易なジャンルを学ぶ第1段階とより長く複雑な内容の著作を学ぶ第2段階があり、いずれの段階でも多様なジャンルが学ばれたが、「知恵文学」の中では「箴言 10-29章のアフォリズム集に似たもの」が王政期の第1段階のはじめに、箴言 1-9章を含む箴言の書、箴言 31章のレムエル王の母の教訓と徳高き妻の賛美、ヨブ記とコヘレトが捕囚後の第2段階で学ばれたかもしれないと言う (Sneed 2015b, 179-181)。

スニードの主張の中で箴言研究にとって興味深い点として、箴言 10-29章のアフォリズム集に、次の4つの機能があったという見方がある。a. 並行法の技法のような文学的スキルを教える、b. イスラエルの標準的な価値、規範、習俗を強化する、c. 宗教的な価値を強化し、国民の主神 (the chief deity of the nation) であるヤーウェのみへの忠誠を強調する、d. アフォリズムの洗練された多くの

⁵⁰ Sneed 2011, 55, 59-60; Sneed 2015b, 40-41. スニードは、「知恵文学」はジャンルではなく、より抽象度の高い文学のモードであるとし、モードには「世界」があるとはいえないかもしれないと述べている。Sneed 2011, 57.

種類が書記たちに知的な刺激を与える (Sneed 2015b, 180)。私見によれば、この4つの機能はこの部分の形式と内容にかなりよく対応している。しかし、このテキストを王政期の書記教育と結びつける彼の見方は再検討が必要である。というのも、近年の箴言研究では、10章1節–22章16節のアフォリズム集は緊密に構成されており、その構成は1–9章と関連性を持っているため、従来のように前者を捕囚前、後者を捕囚後に時代づけることはできないという見解が示されているからである⁵¹。この点を含め、王政期と第二神殿時代の書記文化 (scribalism) については、さらなる検討が必要である⁵²。

3. 3. スチュワート・ウィークス

ウィークスは、旧約学の「知恵」の世界観に関する説の問題点を以下のように総括している。

現代の研究において「知恵」についてなされる陳述の高い割合が、厳密に言えば、箴言の1つないしいくつかの部分に表明されている特定の観念に関するものであり、また、我々は、これらの観念のいくつかがどの程度一般的に支持されていたのか、そもそも一般に知られていたのかさえ、全く知らないのである。(Weeks 2010, 108)

この用語〔知恵〕が思想あるいは世界観の1つの類型を記述するために使われる時、それは、理論的には、知恵のコーパスの異なる書に共有されるものを指すが、実際には、この方法で多くの人によって記述された諸概念 (concepts) の中で、これらすべての書に見出される概念は、あるとしてもごくわずかである。実のところ、研究者がただ一つの知恵文書から「知恵」の諸観念 (ideas) を推定したり、ヘブライ語の知恵文書のどこにも見出さ

⁵¹ Schipper 2018, 115–116, 604, 835 note17.

⁵² Hamilton 2015 参照。

れない観念を、ソロモンに関する話、知恵文学の起源に関する諸理論、あるいは他の諸民族と現象を「知恵がある」と述べる古代の記述に基づいて、知恵として特徴づけることは、きわめてよくあることである。(Weeks 2016a, 3)

「知恵」の世界観や思想として提示されるものは、旧約の「知恵文学」の一部にしから見られない、あるいはどこにも見出せないものである⁵³。さらにウィークスは、いわゆる「知恵」の世界観だけが問題なのではなく、「知恵文学」というカテゴリーの利用によって「知恵文書〔箴、ヨブ、コヘ〕の間にそれらの内容から自明ではない一貫性」(Weeks 2016a, 13)が想定されることが、より重大な問題点であると言い、このカテゴリーの有用性に疑問を投げかけている。

今後の研究について、ウィークスは2つの提案をしている。その1つは、きわめてシンプルである。「我々はもう一度それら〔箴、ヨブ、コヘ〕を個別に語ることを始め、それらの意義とその後の影響が何らかのもっと広範な伝統によって常に媒介されたとは限らないことを正しく認識し、我々ががそれらを論じる方法をこれまでよりももっと精確なものにしなければならない」(Weeks 2016a, 23)。「知恵文学」と他のテキストの関係について論じる時、「知恵」の影響や「知恵的」と言うのではなく、個別のテキストの類似や依拠を指摘すべきである (Weeks 2016a, 18)。

ウィークスのもう1つの提案は、「教訓」(instruction)と「アフォリズム文

⁵³ 「知恵」の特有の世界観に関する従来の学説を批判するウィークスに対して、シェレンベルクは、旧約の知恵文学の「5つの書が世界理解 (understanding of the world) におけるいくつかの根本的前提 (basic premises) を共有していること、それが旧約のその他の書に反映される諸前提とは異なっていること」(Schellenberg 2015, 116)の論証を試みている。「根本的前提」とは、例えば、「宇宙は安定しており、世界には変化することのない内在的な1つの秩序があるという想定(中略)世界は永遠に同じものに留まるという観念」(Schellenberg 2015, 122)のようなきわめて抽象度の高いものである。旧約の諸文書から一部のテキストを抜き出し、それによって世界の安定性に関する見解が「5つの書」と「旧約のその他の書」で根本的に異なることを示すというシェレンベルクの方法(Schellenberg 2015, 121-126)は、説得力に欠けるように見える。

学」(sentence literature) という2つの文学ジャンルが、古代近東において長期にわたって読者に知られていたジャンルだったと想定し、これらを定め、テキストの分析に用いることである⁵⁴。

3. 4. ウィル・カインズ

カインズは、2019年の初めに『「知恵文学」の訃報—ある聖書コーパスの誕生, 死亡, 間テクスト的再統合』(以下『訃報』)と題する研究書を公刊した(Kynes 2019)。この書は、序論、第1部歴史的なメタ批評(1-3章)、第2部ジャンルの方法論(4章)、第3部知恵文学の再統合(5-7章)からなり、第1部では、旧約文書のカテゴリーとしての「知恵」概念の問題点と歴史的起源、第2部では、複数の視点による複数のジャンルにおけるテキストの読み方、第3部では、「知恵」というカテゴリーの束縛からの解放によって「知恵文学」のテキストの解釈と知恵の概念に与えられる新しい可能性について考察している⁵⁵。

今回の議論には、この書の序論から4章までが特に重要であるが、序論と1章の主な内容は本稿の1と2ですすでに取り上げた。そこで、以下ではまず2章を簡単に、次に3章と4章をより詳しく取り上げたい。

3. 4. 1. 「知恵文学」の祖先は古代には見出されない

カインズは、『訃報』の2章で「知恵文学」というカテゴリーの祖先が古代に存在するという説について検討している(Kynes 2019, 60-81)。祖先の候補となるもの、すなわちヨセフス及びフィロンの記述、ヘブライ語正典の三区区分構造における第三区分、ギリシア語正典の四区分構造における第三区分、ソロモンと結びつけられる文書群、書名に知恵という語を含む文書群などを取り上げ、

⁵⁴ Weeks 2010, 3-5, 9-18, 141-144; Weeks 2016a, 15-21, 23. また Weeks 2007, 4-66 も参照。ウィークスは、「教訓」と「アフォリズム文学」を合わせた「助言文学」(advice literature) という新しい名称を用いている。Weeks 2010, 3.

⁵⁵ 1章には Kynes 2015 が少し修正されて、3章には Kynes 2016 が大きく修正されて収められている。

その内容と定義を調査し、現代の「知恵」カテゴリーに近いといわれるものでも、その内容と定義は現在のそれとは大きく異なり、その間には量的だけではなく、質的な違いがあると結論している (Kynes 2019, 80)。

3. 4. 2. 19 世紀のドイツにおける「知恵文学」カテゴリーの起源

『訃報』の3章でカインズは、「知恵文学」というカテゴリーは19世紀中葉のドイツに生まれたという説を提示する。

クレンショウは、「知恵文学」というカテゴリーを独立の存在として最初に認めたのは、1908年に『格言、伝説、詩におけるイスラエルの知恵』(Meinhold 1908)を出版したヨハンネス・マインホルトだとしている(Crenshaw 1976, 3)。これは以後の知恵文学研究でしばしば引用されるが、カインズはこの数年前に『ヘブライの知恵文学』、『旧約の知恵文学』と題された研究書が出版されており、「知恵文学」というカテゴリーは19世紀に遡ると言う⁵⁶。そして19世紀後半の研究書で「知恵文学」カテゴリーを取り上げるものを調査し⁵⁷、それらにおける参照文献を確認し、複数の研究書で1851年に出版されたヨハン F. ブルッフの『ヘブライ人の知恵の教え—哲学史に関する一論考』(Bruch 1851)が参照されているという結果を示す (Kynes 2019, 83–85)。

ストラスプールの神学校で学び、同地の大学の神学部の教授を務めたブルッ

⁵⁶ R. スメントの論文「19世紀の研究における知恵の解釈」(Smend 1995)では「知恵文学」というカテゴリーは前提されており、カテゴリーの成立の問題は取り上げられていない。管見によれば、19世紀のドイツにおけるこのカテゴリーの起源を論じたのはカインズ (Kynes 2016) が初めてである。なお Weeks 2016a も19世紀の学者たちを取り上げている。ウィークスは、20世紀の研究の「知恵」の観念には、19世紀の学者たちのそれとは異なる部分があるとして、両者の連続性についてはカインズよりも慎重な見方を示している。Weeks 2016a, 12 note 34.

⁵⁷ Kynes 2019, 83–85. 「知恵文学」カテゴリーとは、ヘブライ語聖書の3つの書(箴, ヨブ, コヘ)あるいは第二正典を含む5つの書(箴, ヨブ, コヘ, シラ, 知)。このカテゴリーを論じるが、「知恵」という用語を使用しないものもある。なおカインズは述べていないが、デリッチは3つの書(箴, ヨブ, コヘ)の他に雅歌を「知恵」に含めている。Delitzsch 1864, 5–6.

フ (1792–1874) は⁵⁸、副題に示唆されているように、この書で「ヘブライ人の哲学」の解明を課題とした。彼は、この書のはじめで、旧約に含まれる「哲学」を論じた例として 19 世紀前半の 4 人の学者の著作を挙げている⁵⁹。ブレッシヒは箴言を哲学的な格言文学と捉え、デ・ヴェッテは実践哲学と思弁哲学に言及し、ウンブライトは箴言注解においてヘブライ人の知恵を称賛し、エヴァルトはこの民族における知恵の始まりと学問の営み及びソロモン時代の自由な思弁的な思考の発達を認めた (Bruch 1851, 5)。ブルッフは、「これらの異なる見解を前に、ヘブライ哲学があると言えるのか、言えるとするれば、いかなる度合いにおいてであるかをあらたに調べる」ことをこの書の課題とすると言う (Bruch 1851, 5–6)。

ブルッフの著作は 3 つの部分からなる。第 1 部では、創世記の「宇宙の起源に関する断片」(創 1:1–2:4; 2:4–3:24)、第 2 部では、「ヘブライ人の知恵の捕囚前の所産」として箴言とヨブ、第 3 部では「ヘブライ人の知恵の捕囚後の所産」としてコヘレトの言葉、シラ書、ソロモンの知恵が取り上げられており、また第 3 部にバルク書を論じる短い部分がある。

カインズによれば、ブルッフの解釈には、彼以前のいくつかの文献にもみられる「知恵文学がイスラエルの神権政治の特殊主義から独立している」という考えが顕著にみられる (Kynes 2019, 98)。上述のブルッフ自身が挙げている文献に見てとれるように、哲学あるいはソロモン時代の自由な学問と結びつけられた「知恵文学」という概念の端緒は、19 世紀前半にある。しかし、「イスラエル宗教の内部において他と区別される特有の諸特徴をもつ『知恵』というカテゴリー」を「最も完全に、顕著に、影響力をもって」提示したのは、ブルッフであるとカインズは評価する (Kynes 2019, 101)。このようにカインズがブルッフ

⁵⁸ Gerber 1955, 641.

⁵⁹ カインズは、ここで挙げられるデ・ヴェッテ、ウンブライト、エヴァルトの著作、及び別の箇所でも参照されているファトケの著作を取り上げ、それぞれが「知恵」文書をどのように特徴づけ、また、イスラエル史にどのように位置づけているかを記述している。Kynes 2019, 90–94.

フを名指しする理由には、ブルッフ以前に5つの書（箴言、ヨブ、コヘ、シラ、知）を1つのカテゴリーとしている事例がないという調査結果の他に、「イスラエルの神権政治の特殊主義からの独立」というブルッフによる「知恵文学」の特徴づけが「いわゆる『知恵』テキストに対する長く続く解釈上の道筋を創りだした」（Kynes 2019, 101）というカインズの見方があると思われる。

フランツ・デリッチは、ヨブ記の注解書で、「知恵文学」はイスラエルにおける「普遍主義的、人文主義的、哲学的」な精神態度（*Geistesrichtung*）によってもたらされた（Delitzsch 1864, 5）。「知恵」の作品⁶⁰の「共通の特徴は、特に固有にイスラエルのものから離れた人文主義的立場である」（Delitzsch 1864, 5）と述べ、箴言の注解書では、「イスラエルにおける特有の精神態度としてのホクマー〔「知恵」〕すなわち人文主義に初めて注意を促した」ことをブルッフの功績として称えている（Delitzsch 1873, 38）⁶¹。しかし同時に、「彼〔ブルッフ〕は、正統主義神学に対してのキリスト教哲学の関係になぞらえて、国民の法（*Nationalgesetz*）と国民の祭儀（*Nationalcultus*）に対するそれ〔「知恵」〕の関係が無関心、あるいは敵対的でさえあるとした点では誤っている」（Delitzsch 1873, 38）と批判している。イスラエルの律法と祭儀に対する「知恵」の関係について、ブルッフとデリッチの間には見解の相違がある。

しかしここで重要なのは、2人のどちらが正しかったかを問うことではなく、ブルッフを批判するデリッチの言葉に見てとれるように、ブルッフが提示し、デリッチが「普遍主義的、人文主義的、哲学的」と評した「知恵」というカテゴリーは、19世紀のドイツの政治、宗教、学問の状況に密接に関連していることを認識することである⁶²。

以上のように、カインズは、旧約の「知恵文学」というカテゴリーには19世

⁶⁰ ここでは、箴言、コヘレト、ヨブ記の他に、雅歌が含まれている。Delitzsch 1864, 5-6.

⁶¹ 「知恵」とは「人文主義」であるという定義は、20世紀後半の聖書事典にも見られる。ケラーによれば、「知恵」は「現代の学問的用語法では、古代オリエントの人文主義を表す包括的用語」である。Keller, C.A. + 西村俊昭 1989.

⁶² Kynes 2019, 98-99 参照。

紀のドイツという時代と場所と結びついたイデオロギー的性質があること、その事実は、ブルッフの『ヘブライ人の知恵の教え』に注目することによって明らかになることを強調している。

以上が『訃報』の3章の概要である。ここでカインズを離れ、19世紀前半の見解の中で、ブルッフは支持しなかったが、他の学者を通して20世紀の「知恵」の概念に引き継がれた2つの概念について補足しておきたい⁶³。その1つは「知恵の教師」である。ウィークスによれば、ファトケは、箴言、コヘレト、ヨブ記の作者についてこの用語を用いたが、これは、「当時ドイツの学者たちによって様々な古代の哲学者について広く用いられた語」であり、ユダヤの「知恵文学」を「人生に関する実際的なあるいは哲学的な問題に取り組む個人たちというもっと広い人間の現象」の中に位置づけることを可能にした(Weeks 2016a, 6-7)。この概念は、20世紀の聖書学で、古代エジプト及び西アジアの書記教育の教師の像と混じり合いながら生き延び、現在も、例えば、箴言、死海文書の「知恵文書」(4Q525)、ミシュナ・アヴォートの作者あるいは語り手について使われている⁶⁴。

もう1つの概念は「知恵学校」である。この用語は、エヴァルトによるイスラエル史の記述で用いられている。エヴァルトは、ソロモン時代に興隆したという知恵あるいは学問のその後の盛衰を述べる中で、知者たちという集団の形成と「知恵学校」の発達について記している⁶⁵。エヴァルトによる「知恵」の記述は、「知恵」の諸文書よりもソロモンに関する聖書の記述や聖書の他の箇所に基づいており⁶⁶、20世紀後半にみられる、「知恵文学」以外のテキストを用いて

⁶³ ブルッフは、ヘブライの知恵ある者たちは職業的哲学者ではなく、様々な階級に属していたとし、「知恵の教師」や「知恵学校」の観念を拒否した。Bruch 1851, 57-58; Weeks 2016a, 7; Kynes 2019, 93。なおファトケとエヴァルトの文献は未入手であるため、以下はウィークスとカインズに拠る。

⁶⁴ Schipper 2018, 779; 勝村 2019, 209; 長窪 2010, 14。

⁶⁵ Weeks 2016a, 9-10 参照。カインズは、エヴァルトについて、彼は「知恵」と「知者たち」の歴史を書いたが、カテゴリーとしての「知恵文学」の観念はまだ持っていなかったと指摘している。Kynes 2019, 93。

⁶⁶ Weeks 2016a, 10 参照。

「知恵」を記述する方法が、19世紀にすでに始まっていることがわかる。

3. 4. 3. 複数の視点による複数のジャンルにおけるテキスト

『訃報』の4章で、カインズは、「知恵文学」のテキストを「知恵」という唯一のジャンルにおいて読むのではなく、複数の視点から生じる異なるジャンルにおいて読むことを提案している⁶⁷。これまで、ヘブライ語聖書の「知恵文学」（箴、ヨブ、コヘ）は、「普遍主義的、人文主義的、哲学的」という「知恵」の概念が中心にある19世紀の視点からテキストを見る固定的な見方によって、文書の解釈が著しく狭められてきた。しかし、複数の視点から生じる複数のジャンルにおいて文書を読むことによって、それらの文書の解釈と知恵（小文字）の概念に新しい機会が与えられるというのである⁶⁸。

例としてカインズは、ソロモンに結びつけられた文書群（箴、コヘ、雅）、デ・ヴェッテの見いだした不幸の経験によって結ばれた文書群（ヨブ、コヘ、嘆きの詩編）、ブルッフによる哲学の文書群（箴、コヘ、ヨブ）を挙げている（Kynes 2019, 132–133）。これらは、ジャンルとは読者によって「諸々のテキストの間に知覚された何らかの有義な類似性のゆえに集められたテキストのグループ」（Kynes 2019, 13）であるとする定義によれば、それぞれが1つのジャンルである。例えば、コヘレトの言葉はこのすべてのジャンルに参加しており、これらの複数のジャンルの視点から見ることによって、コヘレトの言葉の解釈に新しい可能性が与えられる。そして、このような方法で、従来の「知恵」カテゴリーの束縛から「知恵文学」を解放する時、小文字の知恵の概念、つまり多数の想定を負わされてしまった「知恵」の概念ではなく、テキストの中で語られている知恵に新しいチャンスが与えられるとカインズは言う（Kynes 2019, 135）。

⁶⁷ 「多数の視点による複数のジャンル」（genres from multiple perspectives）（Kynes 2019, 107）, 「ジャンルへの多次元的アプローチ」（a multidimensional approach to genre）（Kynes 2019, 124）, 「『複数中心的な』アプローチ」（a "polycentric" approach）（Kynes 2019, 135）という3つの概念が用いられているが、これらは同じアプローチを指すと思われる。

⁶⁸ Kynes 2019, 135 参照。

カテゴリーとしての「知恵」が死んだことを主張して、私は、知恵〔小文字〕の概念をそれと共に葬ろうとしているのではなく、このカテゴリーがそれに絡みつけた諸々の想定をそれから取り除こうとしているのである。「知恵文学」の死は、知恵のための新しい生となるだろう。(Kynes 2019, 18)

4. 箴言研究に対する意義

前節において述べたように、3人の研究者はそれぞれヘブライ語聖書の「知恵文学」の新しい読み方を提案しているが、一方のスニードと他方のウィークス及びカインズの間にはかなり大きな違いがある。スニードは、「知恵」はテキスト成立時代の読者に知られていたジャンル（彼はモードという）だったと想定し、書記文化に関する近年の研究を参照して、このジャンルの社会における位置とその機能を考察している。一方、ウィークスとカインズは、「知恵」というカテゴリーには旧約の「知恵文学」の文書の解釈を狭め、また歪めるという重大な欠陥があると言い、このカテゴリーを前提しない、もしくは相対化する読み方を提案する。他方彼らは、それらの文書の社会的環境や機能に関する従来の学説への対案は示さない。というのも、彼らは、ジャンルからテキストの社会的環境や機能を推論できるという伝統的な形式批判の前提は妥当ではなく、ジャンルの観点からのテキスト研究とテキストの成立の社会的環境の研究を分けるべきだと考えているからである。従って、箴言研究に対するスニードの提案とウィークスとカインズの提案のもつ意義は異なる。箴言と書記文化に関するスニードの見解の問題点については前節で取り上げたので、以下では、ウィークスとカインズによって提案された「知恵」カテゴリーによる束縛からの解放によって、箴言研究にもたらされる3つの新しい機会について述べたい。

第1は、「知恵」伝統に関する従来の諸前提にとらわれずに、箴言と「知恵文学」以外の文書との関係を調査することである。近年、箴言1-9章と申命記の関連性が注目され、また箴言全般における「主への畏れ」や「トーラー」など

の用語の意味が再検討されて、箴言と律法の関係が問い直されている⁶⁹。ウィークスとカインズの提案はこの方向の研究をさらに促進する。

第2は、従来「知恵」概念の下にまとめられてきた諸特徴を個別に用いて、箴言とその他のテキストの比較を行うことである。例えば、日常生活における振舞いに関する実際的な勧告、観察や思考の結果を簡潔な形で述べたアフォリズム、知恵や知識を求めて知恵ある者になれという勧告、人間による知恵の探求に関する省察、知恵の概念そのものへの関心などの点が考えられる。

第3は、ウィークスに倣い、古代近東の読者に知られていた文学ジャンルとして、「知恵文学」ではなく、「教訓」というジャンルを定めることである⁷⁰。その際、ジャンルの指標を、ジャンルの必須の条件として扱うのではなく、個別のテキストのジャンルへの参加の度合いをはかるために用いる。また、1つのテキストは複数のジャンルに参加することができ、ジャンルは変化するという理解を導入する⁷¹。ウィークスは、箴言 1-9 章の研究においてすでにこの方法を実践しており、「教訓」について次のような指標を提示している。「生きることにに関する助言を提供するテキスト」で、それを「父が息子に実践的な知識を伝える発言として表す」もの⁷²。彼は、この指標によって集められた「教訓」ジャンルの作品⁷³と箴言を比較するが、ジャンルをテキストの成立の社会的環境や機能を推定するためではなく、文学的な特徴を把握するために用いている。

主要な箴言研究者であるフォックスは、2015年の論集において「訓育的な知恵文学」（「教訓」）は「実在のジャンル」すなわちテキストの成立の時代に知られていたジャンルであるが、「訓育的な知恵」と「批判的な知恵」を合わせた「知

⁶⁹ Weeks 2007; Schipper 2012; Schipper 2018 参照。

⁷⁰ 「アフォリズム文学」（sentence literature）を古代近東に知られていたジャンルとして定めるというウィークスの提案については、「教訓」よりも困難だと筆者には思われる。この可否の検討は今後の課題としたい。

⁷¹ 「教訓」の定義を論じた初期の例であるレムヘルトでは、分類学的ジャンル理解に従って「教訓」の必須の指標を探る方法が取られており、彼の結論は柔軟なジャンル理解とは相容れない。Römhald, 1989.

⁷² Weeks 2010, 3-4 参照。

⁷³ Weeks 2007, 4-66 参照。

「知恵文学」は、カインズの指摘する通り、近代の学者による構成概念であることを認める⁷⁴。その上で、「知恵文学」の概念は「発見的ジャンル」としての有用性を持っており、妥当であると言う⁷⁵。しかし「実在のジャンル」である「教訓」とそれを含む「発見的ジャンル」である「知恵文学」を併用することは、研究にとって有益だろうか。それよりも、「教訓」というジャンルを定め、地域ごとに異なる特徴をもつ様々な関連文学があると見た方がよいのではないだろうか⁷⁶。

以上、新しい3つの機会について述べたが、これらのアプローチはすでに始まっている。ウィークスとカインズは、はじめから不明瞭にしか定義されていなかった「知恵」の定義の厳密化に時間を費やすのではなく、新しいアプローチを発展させていくよう研究者を促している。

最後に19世紀の「知恵」概念の生き残りの可能性について一言述べておきたい。カインズが示したように、ここでは「知恵」は、人文主義と同一視されていた。ヘブライ語聖書の中に人文主義を探すというアプローチが今後そのまま保たれることはないだろう。しかし、このアプローチは20世紀に脱皮し、聖書における文学性の探求へと変身したように思われる。並木浩一は、ヨブ記の文学性を論じる中で、その度合いを確かめる4つの指標の1つとして、「人間性の肯定」を挙げている⁷⁷。人文主義が構成概念であるように⁷⁸、文学もまたそうである。聖書における文学性の探求は、これからどのように変身していくのだろうか。

* 本稿は「2017年度南山大学パッチ研究奨励金 I-A-2 (Nanzan University Patche Research Subsidy I-A-2 for the 2017 academic year)」の助成による研究成果の

⁷⁴ Fox 2015, 75–83. 「訓育的な知恵文学」は「倫理的な教訓」とも呼ばれている。

⁷⁵ Fox 2015, 75, 82.

⁷⁶ 2015年の論集における古代エジプトの教訓に関するシュパックの論文は内容的に大変有益である。表題における「エジプトの知恵」を「エジプトの教訓」とすれば、論文の価値は一層明確になる。Shupak 2015.

⁷⁷ 並木 2003, 60–61.

⁷⁸ 伊藤, 三島 1998, 1332–1334 参照。

一部である。

参考文献

- 外国語雑誌，叢書等の略記は The SBL Handbook of Style: Second Edition, Atlanta: SBL Press, 2014 に準拠した。
- Alster, Bendt. 2005. *Wisdom of Ancient Sumer*. Bethesda, MD: CDL.
- Assmann, Jan. 1990. *Ma`at: Gerechtigkeit und Unsterblichkeit im Alten Ägypten*. München: Beck.
- Boström, Lennart. 1990. *The God of the Sages: The Portrayal of God in the Book of Proverbs*. ConBOT 29, Stockholm: Almquist & Wiksell.
- Bruch, Johann Fr. 1851. *Weisheits-Lehre der Hebräer: Ein Beitrag zur Geschichte der Philosophie*. Strasbourg: Von Treuttel & Würtz.
- Brunner, Hellmut. 1952. Die Weisheitsliteratur. Pages 90–110 in *HdO I Ägyptologie 2*. Leiden: Brill.
- Cohen, Yoram. 2013. *Wisdom from the Late Bronze Age*. Atlanta: SBL Press.
- Collins, John J. 1997a. *Jewish Wisdom in the Hellenistic Age*. OTL. Louisville: Westminster John Knox.
- Collins, John J. 1997b. Wisdom Reconsidered, in Light of the Dead Sea Scrolls. *DSD* 4:265-281.
- Collins, John J. 2010. Epilogue: Genre Analysis and the Dead Sea Scrolls. *DSD* 17:418–430.
- Corley, Jeremy. 2013. *Sirach*. New Collegeville Bible Commentary, Collegeville, MN: Liturgical Press.
- Crenshaw, James L. 1976. Prolegomenon. Pages 1–60 in *Studies in Ancient Israelite Wisdom*. Edited by James L. Crenshaw, New York: Ktav.
- Crenshaw, James L. 2010. *Old Testament Wisdom: An Introduction*. 3rd ed. Louisville: Westminster John Knox.
- Delitzsch, Franz. 1864. *Biblischer Commentar über die poetischen Bücher des Alten*

- Testaments 2: Das Buch Iob*. Leipzig: Dörffling & Franke.
- Delitzsch, Franz. 1873. *Biblischer Commentar über die poetischen Bücher des Alten Testaments 3: Das salomonische Spruchbuch*. Leipzig: Dörffling & Franke.
- Duff, David ed. 2000. *Modern Genre Theory*. Harlow: Longman.
- Fox, Michael V. 1995. World Order and Ma`at: A Crooked Parallel. *The Journal of the Ancient Near Eastern Society* 23:37-48.
- Fox, Michael V. 1996a. Review of Early Israelite Wisdom by Stuart Weeks. *JAOS* 116.1:138-139.
- Fox, Michael V. 1996b. The Social Location of the Book of Proverbs, Pages 227–239 in *Texts, Temples, and Traditions*. Edited by M. V. Fox et al., Winona Lake, IN: Eisenbrauns.
- Fox, Michael V. 2000. *Proverbs 1-9: A New Translation with Introduction and Commentary*. AB 18A. New York: Doubleday.
- Fox, Michael V. 2009. *Proverbs 10-31: A New Translation with Introduction and Commentary*. AB 18B. New Haven & London: Yale University Press.
- Fox, Michael V. 2015. Three Theses on Wisdom. Pages 69-86 in Sneed 2015c.
- George, A. R. 2003. *The Babylonian Gilgamesh Epic: Introduction, Critical Edition and Cuneiform Texts*. Vol. 1, Oxford: Oxford University Press.
- Gerber, Harry. 1955. Bruch, Johann Friedrich. Page 641 in vol. 2 of *Neue Deutsche Biographie*. [Online-Version]. URL: <https://www.deutsche-biographie.de/>
- Gese, Hartmut. 1962. Weisheit. 1574–1577 in vol. 6 of RGG. 3rd ed. Edited by Hans von Campenhausen et al. Tübingen: Mohr Siebeck.
- Goff, Matthew. 2009. Recent Trends in the Study of Early Jewish Wisdom Literature: The Contribution of 4QInstruction and Other Qumran Texts. *CurBR* 7:376-416.
- Goff, Matthew. 2010. Qumran Wisdom Literature and the Problem of Genre. *DSD* 17:315-335.
- Hamilton, Mark W. 2015. Riddles and Parables, Traditions and Texts: Ezekielian

- Perspectives on Israelite Wisdom Traditions. Pages 241–262 in Sneed 2015c.
- Harrington, Daniel J. 1996. *Wisdom Texts from Qumran*. London: Routledge.
- Hausmann, Jutta. 2009. Weisheit (AT). In *WiBiLex*.
<https://www.bibelwissenschaft.de/wibilex/> (2020/02/29 アクセス)
- Hermisson, Hans-Jürgen. 1968. *Studien zur israelitischen Spruchweisheit*. WMANT 28. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag.
- Kynes, Will. 2015. The Modern Scholarly Wisdom Tradition and the Threat of Pan-Sapientialism: A Case Report. Pages 11–38 in Sneed 2015c.
- Kynes, Will. 2016. The Nineteenth-Century Beginnings of Wisdom Literature, and Its Twenty-First-Century End? Pages 83–108 in *Perspectives on Israelite Wisdom: Proceedings of the Oxford Old Testament Seminar*. Edited by John Jarick. London: Bloomsbury.
- Kynes, Will. 2019. *An Obituary for Wisdom Literature: The Birth, Death, and Intertextual Reintegration of a Biblical Corpus*. Oxford: Oxford University Press.
- Lambert, W. G. 1960. *Babylonian Wisdom Literature*. Oxford: Clarendon.
- Meinhold, Johannes. 1908. *Die Weisheit Israels in Spruch, Sage und Dichtung*. Leipzig: Quelle & Meyer.
- Murphy, Roland E. 1981. *The Wisdom Literature*. FOTL 13. Grand Rapids: Eerdmans.
- Murphy, Roland E. 2002. *The Tree of Life: An Exploration of Biblical Wisdom Literature*. 3rd ed. Grand Rapids: Eerdmans.
- Newsom, Carol A. 2007. Spying out the Land: A Report from Genology. Pages 19–30 in *Bakhtin and Genre Theory in Biblical Studies*. Edited by Roland Boer. Atlanta: SBL Press.
- Newsom, Carol. 2010. Pairing Research Questions and Theories of Genre: A Case Study of the Hodayot. *DSD* 17:270-288.
- Römheld, K.F.D. 1989. *Die Weisheitslehre im alten Orient: Elemente einer Formgeschichte*, Biblische Notizen Beiheft 4. München.

- Schellenberg, Annette. Don't Throw the Baby Out with the Bathwater: On the Distinctness of the Sapiential Understanding of the World. Pages 115-143 in Sneed 2015c.
- Schipper, Bernd Ulrich. 2012. *Hermeneutik der Tora: Studien zur Traditionsgeschichte von Prov 2 und zur Komposition von Prov 1-9*. BZAW 432. Berlin: de Gruyter.
- Schipper, Bernd Ulrich. 2018. *Sprüche (Proverbia) Teilband 1: Proverbien 1,1-15,33*. BKAT XVII/1, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Schwienhorst-Schönberger, Ludger. 2013. Alttestamentliche Weisheit im Diskurs. ZAW 125: 118-142.
- Shupak, Nili. 2015. The Contribution of Egyptian Wisdom to the Study of the Biblical Wisdom Literature. Pages 265–304 in Sneed 2015c.
- Smend, Rudolf. 1995. The Interpretation of Wisdom in Nineteenth-Century Scholarship. Pages 257–268 in *Wisdom in Ancient Israel: Essays in Honour of J.A. Emerton*. Edited by John Day et al. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sneed, Mark. 2011. Is the "Wisdom Tradition" Tradition? CBQ 73: 50–71.
- Sneed, Mark R. 2015a. "Grasping after The Wind": The Elusive Attempt to Define and Delimit Wisdom. Pages 39–67 in Sneed 2015c.
- Sneed, Mark R. 2015b. *The Social World of the Sages: An Introduction to Israelite and Jewish Wisdom Literature*. Minneapolis: Fortress.
- Sneed, Mark R, ed. 2015c. *Was There a Wisdom Tradition?: New Prospects in Israelite Wisdom Studies..* Atlanta: SBL Press.
- Weeks, Stuart. 1994. *Early Israelite Wisdom*. Oxford: Oxford University Press.
- Weeks, Stuart. 2007. *Instruction and Imagery in Proverbs 1–9*. Oxford: Oxford University Press.
- Weeks, Stuart. 2010. *An Introduction to the Study of Wisdom Literature*. T&T Clark Approaches to Biblical Studies, London: T&T Clark.
- Weeks, Stuart. 2016a. Is "Wisdom Literature" a Useful Category? Pages 3–23 in

- Tracing Sapiential Traditions in Ancient Judaism*. Supplements to the Journal for the Study of Judaism 174. Edited by Hindy Najman et al. Leiden: Brill.
- Weeks, Stuart. 2016b. The Place and Limits of Wisdom Revisited. Pages 3–23 in *Perspectives on Israelite Wisdom: Proceedings of the Oxford Old Testament Seminar*. Edited by John Jarick. London: Bloomsbury.
- Wright III, Benjamin G. 2010. Joining the Club: A Suggestion about Genre in Early Jewish Texts. *DSD* 17: 289–314.
- Yoder, Christine Roy. 2011. Wisdom. In *Oxford Bibliographies*.
<http://www.oxfordbibliographies.com/> (2020/02/29 アクセス)
- Zahn, Molly M. 2012. Genre and Rewritten Scripture: A Reassessment. *JBL* 131: 271–288.
- Zenger, Erich, ed. 2012. *Einleitung in das Alte Testament*. 8. vollständig überarbeitete Aufl. Kohlhammer-Studienbücher Theologie. Stuttgart: Kohlhammer.
- Keller, C.A. + 西村俊昭 1989 「知恵」『旧約新約聖書大事典』荒井献他編，教文館，764 頁。〔原著 1962–1979 年出版〕
- 飯謙 2002 「知恵文学」『岩波キリスト教辞典』大貫隆他編，岩波書店，735 頁。
- 伊藤博明，三島憲一 1998 「ヒューマニズム」『岩波哲学・思想事典』，岩波書店，1332–1334 頁。
- 岡田明憲 「知恵文学」『デジタル版集英社世界文学大事典』集英社 JapanKnowledge Lib, <http://japanknowledge.com> (2020/02/29 アクセス)。
- 勝村弘也 2004 「ちえ (知恵)」『新共同訳聖書事典』日本キリスト教団出版局，410–411 頁。
- 勝村弘也 2019 『死海文書 X 知恵文書』，ふねうま舎。
- 加藤久美子 2004 「知恵文学 [イスラエル]」『古代オリエント事典』古代オリエント学会編，岩波書店，597–598 頁。
- クレンショウ, J.L. 1987 『知恵の招き：旧約聖書知恵文学入門』中村健三訳，新

教出版社。〔底本は初版 1981 年〕

小山雅人 2004 「知恵文学〔エジプト〕」『古代オリエント事典』古代オリエント学会編, 岩波書店, 597 頁。

月本昭男「知恵文学」『日本大百科全書(ニッポニカ)』小学館, JapanKnowledge Lib, <http://japanknowledge.com> (2020/02/29 アクセス)。

中田一郎 2004 「知恵文学〔メソポタミア〕」『古代オリエント事典』古代オリエント学会編, 岩波書店, 597 頁。

長窪専三 2008 「知恵文学 Wisdom Literature」『古典ユダヤ教事典』教文館, 314 頁。

長窪専三 2010 『ミシュナ IV 別巻 アヴォート』ユダヤ古典叢書, 教文館。

並木浩一 2003 『「ヨブ記」論集成』教文館。

西村俊昭 2014 「知恵文学」『改訂新版世界大百科事典』平凡社 JapanKnowledge Lib, <http://japanknowledge.com> (2020/02/29 アクセス)。

フォン・ラート, G. 1988 『イスラエルの知恵』勝村弘也訳, 日本基督教団出版局。

渡辺和子 2010 「『ギルガメシュ叙事詩』は「知恵文学」か—「死生の秘密」への旅路」『死生学年報』65-104 頁。